

令和5年度畜産学教育協議会シンポジウム
畜産学教育における家畜生産実習について

主催：畜産学教育協議会
後援：(公社)日本畜産学会
日時：令和5年9月18日(月)16:00~17:30
会場：帯広畜産大学 第IX会場(32番講義室)

シンポジウム開催にあたって

本畜産学教育協議会シンポジウムは、この4年間はコロナ感染症蔓延防止のため未開催あるいはオンライン開催という状況が続いておりました。幸い蔓延状況が沈静化したことから、今回は対面で本会シンポジウムを開催出来る運びとなり、担当事務局として大変うれしく思っております。

大学の畜産学教育機関においては、畜産学が実産業をベースにしていることから、家畜生産から利用に至る過程の実際や現状の課題、さらにはそれらを改善・解決する技術と基礎理論を教育されていることと思います。その教育の中で、「家畜生産の実際を経験させる実習」（以下、家畜生産実習）は、それ自体のみならず、先にある種々の教育・研究分野の内容と課題を、学生に体系的かつ具体的に考えさせる上で重要であり、畜産学教育のベースにあたるものです。このようなことから、家畜を扱うあるいは家畜の生産現場を知っておくという家畜生産実習は、多くの大学では必須の授業単位とされています。しかし、その教育にあたる教員の皆様は、現状に工夫を加えながら実践されていることかと思いますが、多くのジレンマを抱えておられるのではないのでしょうか。

各大学における家畜生産実習を支える施設、動物、支援体制は大学予算削減の中で年々貧弱化していっている現状にあります。また、畜産学を学んだ学生であっても、昨今は社会構造が多様化し、卒業後の進路や就職先は多様化しております。このような現状の中で、畜産学教育における家畜生産実習は、今後どのような目的と方法で実施していくべきなのか、どうあるべきなのか、改めて考えるときではないかと思えます。このようなことから、本シンポジウム「畜産学教育における家畜生産実習について」を開催するに至った次第です。

本シンポジウムでは、大学において畜産学教育に長年携わってこられた、北海道大学教授・後藤貴文先生と、酪農学園大学教授・泉賢一先生には、家畜生産実習の理想、展望、実際、課題についてご講演いただきます。さらに、十勝農業協同組合連合会 参事 太田雄大様からは畜産学を学んだ学生の就職先の一つとして、また生産者を直接的に支援する組織として、どういった知識やスキルを備えた人物を求めるのかについてご講演いただきます。本シンポジウムを通して、今後の家畜生産実習のあり方について情報交換と議論が深まれば幸いです。多くの先生方にご参加いただけますようお願い申し上げます

令和5年9月

畜産学教育協議会
会長 上田 宏一郎
北海道大学大学院農学研究院

令和5年度 畜産学教育協議会シンポジウム 畜産学教育における家畜生産実習について

日時：令和5年9月18日（月） 16:00～17:30

会場：帯広畜産大学 第IX会場（32番講義室）

プログラム

1. 開会の辞
2. 「激動の時代の中でZ世代に対する大学における
家畜生産実習をどのように位置づけるか」（16:15～16:35）
後藤 貴文（北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 教授）
3. 「酪農学園大学における健士健民入門実習と学外農場実習」（16:35～16:55）
泉 賢一（酪農学園大学 農食環境学群 循環農学類 教授）
4. 「生産現場が求めるスキルと若手人材」（16:55～17:15）
太田 雄大（十勝農業協同組合連合会 参事）
5. 総合討論（17:15～17:30）
6. 閉会の辞

激動の時代の中で Z 世代に対する
大学における家畜生産実習を
どのように位置づけるか

後藤 貴文

(北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター)

激動の時代の中で Z 世代に対する大学における 家畜生産実習をどのように位置づけるか

北海道大学
北方生物圏フィールド科学センター
後藤 貴文

【はじめに】

昨年度から北海道大学へ異動し、北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーションの生物生産研究農場にて、教育研究に携わっている。私が畜産研究者を目指したモチベーションの一つは、学部時代に受けた牧場での泊まり込みの畜産実習であった。学生にとっては、社会通念に対する価値観の変化、コンプライアンス、ゆとり教育と 80 年代に教育を受けた教員とのギャップ、教員側では働き方改革やハラスメントの普及などこの 30 年余りで、世の中は大きく変遷した。このような時代の変遷の中で、新しい世代、いわゆる Z 世代に対する大学における家畜生産実習をどのように位置づけるかを考えてみたい。

【Z 世代とは】

Z 世代とは、“GenZ”とも呼ばれる。ウィキペディアの“Z 世代”によると、この名称は 1950 年代、ハンガリーの写真家、ロバート・キャパにより出版された、第二次世界大戦後生まれの青年を撮影した写真集「Generation X」より出題する。現代の社会的文脈においては 1991 年、ダグラス・クープランドにより上梓された著書「ジェネレーション X - 加速された文化のための物語たち (英語版)」が国際的にベストセラーとなったことより称されている。解説する研究者によって、少し西暦が異なるが、生まれた年代によって、以下のように世代が呼称されている (ドーシーとヴィラ、2021)。

- ① 1945 以前 伝統主義者世代 (沈黙の世代)
- ② 1946-1964 ベビーブーマー世代
- ③ 1965-1976 年生まれ ジェネレーション X (X 世代)
- ④ 1977-1995 年生まれ ジェネレーション Y (Y 世代、ミレリアル世代)
- ⑤ 1996-2012 年生まれ ジェネレーション Z (Z 世代)

Z 世代は、アメリカでは“生活の隅々までデジタルが浸透した初めての世代であり、9・11 や世界的な不況を経験した親に育てられ、コロナ禍やオンラインゲーム、

イギリスの EU 離脱、型破りなアメリカ大統領の誕生といった出来事を経験している”世代である（ドーシーとヴィラ、2021）。日本でも、バブル崩壊や日本経済が苦しい時代を経験した親に育てられており、日本の Z 世代もアメリカやヨーロッパの政治の影響や、特に新型コロナウイルスのパンデミックによる教育、労働、旅行、政治、及び家族などが、ことごとく壊滅的状态に落ちいる恐怖や不安、脆弱さ、混乱を成長期に味わった。

著者は、ベビーブーマー世代から“得たいの知れぬ”と言われた X 世代の直前に生まれたが、その“得体のしれない”世代から見ても Z 世代は、“さらに得たいのしれない世代”に見える。世界的には現在、Y 世代より Z 世代の人口が多い。アメリカでは Z 世代は約 6100 万人、Y 世代は約 6000 万人で Y 世代を超えた。つまり将来社会を担う Z 世代が増加している。世界的には、Z 世代は 32%、Y 世代は 31%である。アメリカでは Z 世代ブームであり、マーケットは、“Z 世代は今後のターゲット”としている。つまり、今後は生まれた時からデジタル社会に育つ Z 世代を基盤とした社会が展開されていく。一方、日本の Z 世代は約 1886 万人で人口に占める割合は 15%である。日本の社会を動かす 40 歳代以上の人口は約 7600 万人であり、全人口の 60%を占めており、日本の Z 世代の声はマイナーである。このように日本は Z 世代が少ないので、Z 世代のマーケットなどに対する意識が幾分低い。しかし、日本の X 世代や Y 世代がデジタル上で声高に世界に旧体依然とした何かを届けたとしても、世界的に優勢な Z 世代から非難され炎上することになるだろう。ここに世界の意識と日本の意識のずれが生じている。

世界ではこの Z 世代は生まれた時にインターネットが普及しており、物心ついたときには、スマートフォンも普及、多くの情報が瞬時に入ってくるようになった。その生涯の中でスマートフォンの機能は進化し、Z 世代は、PC よりもスマートフォンを主要なコミュニケーションツールとして使用する。欧米では Z 世代の 55%以上が、1 日に 5 時間以上スマートフォンを見ていると報告されている（ドーシーとヴィラ、2021）。情報収集は、紙の新聞は読まず、TV も見ず、おもに Youtube からである。コミュニケーションツールは、メッセージアプリであり、e-mail はもう古く、文字ではなく、画像で情報を送るインスタグラム、情報をいち早くとらえるためにツイッターを使う。facebook も古く、これを使用するのは X 世代や Y 世代であり、Z 世代は特別な団体活動にしか使用しない。重要なものはスマートフォンである。PC は特別な人が使用するものと感じている。SNS は、すべてを活用するが、プラットフォームを使い分けた行動をとる。また、パーソナライゼーションのためのデータの共有とデータの透明性を受け入れている。通販サイトなどでのこれまでの消費行動から見た自分への商品の紹介などがないとストレスなる。X 世代は、これらに違和感があるが、Y 世代はそんなものかな、と思っている。

また、Z 世代は世界とつながり、別の町や海外にいる相手とも交流することができ

るのが当然であり学費ローンや不平等、気候変動、ダイバーシティなどの社会問題に強い関心を持ち、積極的に声を上げる。デジタルメディアの力により、時には1件のツイートや投稿、動画だけで社会に影響を及ぼすことができることを認識しており、そのような力を持つ史上初の世代である。このようなZ世代に対して、どのように畜産を教育すればよいか、ここは立ち止まって考慮しなければいけない時期かもしれない。

【X世代以前から引き継がれる家畜生産実習】

家畜生産実習では、一般的に畜産学現場における基礎的・応用的知識・技能を学び、家畜生産・飼料生産に関する実践力を身に付けることである。これまでは家畜生産実習を受講することにより、現場での基本的な家畜生産・飼料生産に対する幅広い興味や関心を有してもらい、畜産業界を取り巻く環境についても考察できる能力、生産環境などに配慮した持続的な畜産業界の構築に取り組むことのできるような教育が目標とされていた。また、多くの大学では、受講生は合宿方式の家畜生産実習により、畜産業界は一人ではできず、これまで牧野組合的な営みで見られたチームワークのような業務も必要であることを体感してきた(表1)。情緒教育としてもいわゆる“同じ釜の飯を食う”といった仲間意識を強くする重要な位置づけがあったように思う。

表1. 著者が開講していた家畜生産実習スケジュールの例

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目	第5日目	第6日目	第7日目
7:00		起床・朝食	起床・朝食	(起床・朝食)	起床・朝食	起床・朝食	起床・朝食
8:30		給餌	給餌	(給餌)	給餌	給餌	給餌
9:45					データ整理	バス出発	
10:00		家畜管理1 (牛体洗浄 牛舎掃除 (後藤))	食肉生産概論 (後藤) 行動調査準備 (飼育法の確認等)			現地見学 (大分県畜試)	館内清掃
11:00		昼食	昼食	(昼食)	昼食	昼食	バス出発
12:00	実習場到着					講堂紹介・研究紹介	
12:45		草地管理	行動調査 開始	行動調査 終了 (行動調査実験区 の草地調査)	家畜管理2 (体測実習 鼻環取り付け 鼻錠採収)	バス出発 レクリエーション	
13:00	オリエンテーション 館内・場内説明 (後藤)				繁殖学講義 及び実習 (審一)		
13:45				データ整理			
14:00		牧場補修 (技術職員)					
15:00	草地概論 (草地学系客対)						
17:00	買出し(後藤) 夕食準備	買出し(技術職員) 夕食準備	買出し(技術職員) (夕食準備)	買出し(後藤) 夕食準備	買出し(技術職員) 夕食準備		
18:00	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食		
18:30						反省会・懇親会 (大学院生)	
19:30		行動調査 説明 (後藤・大学院生)		データ整理	行動調査発表会		

X世代以前からY世代の前半までの世代は、農家の御子息は別として、受講生は講義で得た座学の知識を、家畜生産実習を受講することにより実際の家畜に触れ、現実の畜産業の何たるかを体感し、関心を深めた。一方、Z世代は、座学だけでなく、スマートフォンでYoutube等により様々な大学における家畜生産実習を見て動画として情報を容易に得ることができる。つまり、マニュアルや多様な管理方法は、瞬時に情報として得ることができる。また、農家が発信しているYoutube等で動画を通じて、また、農家の語る実際の言葉として情報を得ることができる。この時点で、座学だけで得た知識と、動画で得た知識では、X世代以前とは理解レベルに大きな差異がある。このような点からこれまで行われてきた大学独自の家畜生産実習とZ世代に対する家畜生産実習の位置づけは変えていかなければならないかもしれない。また、世界の家畜生産や畜産業や畜産におけるトレンドなどに対する情報も簡単に検索することから、日本の家畜生産と世界におけるアニマルウェルフェアや環境との共生などへの意識のギャップも、その文化の違いとともに意義をしっかりと教育する必要がある。

【家畜生産実習が与える家畜生産の基本原理の学びと情報のみの認識と現実のズレ】

今後、Z世代に対してどのような家畜生産実習を開講していくか、その位置づけを考えて行く必要がある。Z世代は、動画情報などを容易に得ることができるとしても、実際の家畜生産の現場で実習を受講することにより、リアルな家畜を見て、扱って、その管理の難しさや危険性、一方で仔畜のかわいらしさや愛らしさ、また最終的にそこから得られる産物の価値などを実体験するのは、情報だけの世界と意味が異なる。学生は、現実の家畜生産実習の中で、動画情報からの認識と現実のズレを実感する。また、家畜生産における道具や大がかりな施設、コスト感覚、莫大な飼料が必要であることなど、また、日々の給餌や繁殖、去勢や除角など、動画では、実感できないようなことを体で、あるいは疲労感として感じる。著者が前職で家畜生産実習を開講していたころには、できるだけその意義を理解してもらうように説明していた。また日本で当然のようにされている管理方法と海外の牛の飼養との違いも理解してもらうように現場で論じていた。さらに、著者が研究対象としている和牛は、妊娠期から屠畜まで40カ月以上必要であり、飼養方法とその生産される牛肉の研究をするためには50カ月以上必要であることを説明した。畜産学において、マウスやラットなどのモデル動物を扱う基礎研究も大事であるが、この畜産の現実に立ち向かった教育研究が現実の畜産業に対する貢献に果たす役割が大きいことも伝えたいと思っていた。

世界中からあらゆる情報を得ることができるZ世代にとって、情報は溢れている。

しかしながら、圧倒的に体験が乏しい。新型コロナのパンデミックにより体験の乏しさに拍車がかけられた。それをどこかで補う必要があるだろう。このデジタル社会と現実のズレに対する認識は、今後社会を担う Z 世代に対する危惧である。X 世代以前の世代に比較すると、Z 世代は社会進化に伴いコンプライアンスやルールの徹底により、圧倒的に“冒険する”あるいは“自分の考え通りにまず自由に挑戦してみる”という意味では X 世代以前に比較すると、かなり制限された社会となっているように思う。従来、自由に挑戦して痛い目にあう経験を積み重ねることが、重要な人材教育の要素であったが、現代では様々なルール上でできなくなっている。そのような意味で、実際に家畜に触れて、取り扱う家畜生産実習は今後さらに位置づけが高くなる。しかしながら、これまで通りの家畜生産実習だけでは、デジタル社会に生きる Z 世代にはそぐわないように思われ、実習の方向性を改革する必要があるように思う。

【未来の見える牧場における教育はできないのか】

まず、教員自身も未来の畜産はどうあるべきか、このことを議論し、勉強する必要があるように思う。旧態依然とした実習は、基本原理を教育する上で重要であり、家畜に触れ、また管理実習によりその営みを体感するという意味では重要であるが、未来は見えない。それだけでは畜産に夢を感じられない。理想的には、家畜生産実習においては、基本原理を学ぶ古典的な畜舎と、もう一方で、未来の見える畜舎を学生に見せ体験させたい。アニマルウェルフェアや、環境負荷への認識、新しい生物科学の応用、IoT、AI、ロボット、宇宙技術など、未来の畜産はどうなるのか、ワクワクするような体験ができる畜舎を見せたい。そのような家畜生産実習ができれば、もっと畜産に関心を持ち、我が国の、そして世界の食料安保に貢献する人材を育成できるはずである。この部分が日本の畜産教育では圧倒的に欠けているように思う。積極的な Z 世代は、Youtube など世界で世界の畜産動向を見ている。Z 世代は、デジタル情報により、世の中の理想と現実も認識しており、民衆の代表たる政治家のスキャンダル、企業の不正や低い環境意識や差別など情報として日々得ており、ある意味、極めて透明性の高い社会を認識して、極めて現実的である。教員はそれらを認識し、現実を見据えながら、畜産においてもその先を見る意識が重要であろう。前述したように欧米に比べて Z 世代の割合が低い日本では、X 世代や Y 世代のアナログ時代の意向が依然として通る社会であり、“Z 世代は理解できない”という認識で済まされるところがある。しかし、世界では、Z 世代が多数化しており、環境意識やダイバーシティに敏感な Z 世代が今後の世界を担うという認識で社会が動き始めている。畜産系教員は、この Z 世代に対して、どのような家畜生産実習を行うかが、ニューノーマルな日本社会の畜産に影響していくということを認識しなければならない。一方で、政府に対しても、国として SDG s を基盤とした持続的生産や環境保全、食料

安保を目指すのであれば、それを支える農業人材教育と育成が最重要課題であり、そのための大学におけるフィールド教育に資金を投入していただくことを要望したい。多くの大学では、農場や牧場施設は、人員を削減され、施設のにも老朽化しており、基盤的支援が必要と思われる。

人類は、科学技術を発達させ、デジタル社会を構築し、これまで知ることのできなかった世界や人と簡単につながることができる。しかしながら、生まれた時からこのデジタル社会で生きる Z 世代を今後どのように教育すれば、よりよい社会構築に向かうかは、未知の領域である。Z 世代を批判するのではなく、じっくりと交流し理解しあうことが重要と思われるが、Z 世代が、今後の畜産を担い、国内の食料生産を支え、Z 世代を世界と競争できる人材として育成することが重要となるのは言うまでもない。大学教員はこれを重大な任務と認識して、答えは出ないかもしれないが、未来の畜産はどうあるべきかを Z 世代とよく議論しながら、今まさに家畜生産実習の体系を Z 世代に適応させ、デジタル情報の上に現場もしっかり認識できる人材育成のための教育体系に改善していかなければならないように思う。

[参考文献]

ジェイソン・ドーシー & デニス・ヴィラ. Z 世代マーケティング “世界を激変させるニューノーマル”. (訳者 門脇弘典) 株式会社ハーパーコリンズ・ジャパン. 東京, 2021.

酪農学園大学における
健土健民入門実習と学外農場実習

泉 賢一

(酪農学園大学 農食環境学群 循環農学類)

酪農学園大学における健土健民 入門実習と学外農場実習

酪農学園大学
循環農学類/フィールドセンター長/実習担当教員
/元附属農場教員
泉 賢一

酪農大における農業実習

- 健土健民入門実習（学内農場実習）
 - 1年生前期、全学類必修
 - 700人程度×週5日、2週で1巡するように回していく※
→10組（70人/組）
→1組を6班に分ける（12人程度/班）
 - 酪農（2班）、搾乳、園芸、中小家畜、肉牛

※獣医学群については特例あり

学生から見たプログラム

	1班 循環	2班 循環	3班 環境	4班 環境	5班 環境	6班 環境
1週目	ガイダンス					
2週目	学類プログラム					
3週目	専門と健土健民入門					
4週目	搾乳	肉牛	酪農①		作物①	
5週目						
6週目	作物①		搾乳	肉牛	酪農①	
7週目						
8週目	酪農①		作物①		搾乳	肉牛
9週目	学類プログラム					
10週目	肉牛	搾乳	酪農②		作物②	
11週目						
12週目	作物②		肉牛	搾乳	酪農②	
13週目						
14週目	酪農②		作物②		肉牛	搾乳
15週目						

酪農・搾乳実習の教員配置

曜日	クラス	学類	実習区分	人数	担当教員
月	ABC/1	循環	酪農①,②	27~29	泉
			搾乳	13~16	教員A
	ABC/2		酪農①,②	29~30	A
			搾乳	14~15	B
火					
水	DVW/1	循環 / 環境	酪農①,②	27~34	C
			搾乳	13~17	D
	DVW/2		酪農①,②	29~31	E
			搾乳	14~17	C
木	PQR/1	食と 健康	酪農①,②	19~22	B
			搾乳	9~12	E
	PQR/2		酪農①,②	19~20	D
			搾乳	9~10	泉
金	健土健民・獣医学入門実習				

教員6人で700人に対して酪農実習×2回、搾乳実習×1回を実施

前期の時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	専門ゼミナールⅠ [農類3年]ルミノロジー 09:00-10:30		基礎演習 [1年]農類 (隔年開講) 09:00-10:30	家畜管理・栄養学 実験 [農類3年] 09:00-11:25	
2	専門ゼミナールⅢ [農類4年]ルミノロジー 10:40-12:10		農食環境学 概論 [農類1年] 10:40-12:10		
3					家畜栄養学 [農類3年] 13:00-14:30
4	健土健民入門実習 A1・B1・C1 [1年] (隔週) 13:00-17:50			健土健民入門実習 P2・Q2・R2 [1年] (隔週) 13:00-17:50	乳用家畜飼養学実習 [農類3年] 14:40-17:05
5					

実習内容

- 酪農実習 (2班同時、20~25人程度)
 - 牛体測定
 - 育成牛の飼養管理 (エサやり、除糞)
 - 農場見学
 - 分娩観察 (動画視聴)
- 搾乳実習 (1班、10~12人程度)
 - 搾乳の概論 (動画視聴)
 - 搾乳練習 (模擬乳房とバケツミルカー)
 - 搾乳 (ミルキングパーラー、1人2~3頭)

課題（教員側）

1. 牛のハンドリングや基本作業など酪農業についての経験を持つ教員の負担が大きい
2. 1のスキルを持つ教員が高齢化、減少している
→定年した教員の非常勤雇用なども活用して何とかしのいでる
3. 1のスキルを持たない採用間もない教員を実習に組み込まざるを得ない
4. 実習担当教員の持ちコマ的に、その性質上、専門実習も前期に集中する傾向にある（冬季は寒くて牛舎実習を開講できない）
→体力的にキツイ
→研究・卒論指導、論文執筆、出張の時間を取りにくい
5. 実習担当教員は、その専門上、フィールドセンターの役職や委員に任命されやすい
6. 実習担当教員は、その専門上、入試・広報・エクステンション関連の学内業務を依頼されやすい
7. 農場実習は全学類対象（教養科目と同様の位置づけ）であるが、循環農学類の教員が主担当として引き受けている（獣医学類の一部を除く）

課題2

• 学生側

1. 深く実践的な内容にまで踏み込めないで、酪農スキルの習熟面では物足りない
2. 学生の農業や牛に対する関心に温度差がある

• 農場技師（サポート体制）

1. 牧草収穫時期と実習時期が重なるためサポートの負担が大きい/サポートに入れにくい
2. 技師のサポートが得られないので、不慣れな教員も飼養管理や搾乳実習を一人で任されてしまう

学外農場実習（農家委託実習）

- 2年次、夏休み中に20日間
- 全学開講、選択科目
- 道内の酪農を中心として食生産の農場宅で寝食を共にして実習
- 1農場につき1～2名の学生が実習に入る
- 教員が二人1組となって実習受入農場を巡回する（基本的に実習期間中に）

課題

- 大学・教員側
 1. 担当主体・部署
 1. 従来は必修科目で附属農場で管轄、選択科目に移行した後は循環農学類とフィールドセンター+教務課で運営
 2. 担当教員の心理的ストレス、時間的拘束
 1. 主担当教員は緊急携帯電話を持つ
 2. 履修全学生と個別面談を実施
 3. 農家対応
 3. コロナ対応
 1. 派遣しても良いかどうか
 2. 陰性証明や検査の義務づけ
 4. ハラスメント対応
 5. 巡回教員の選出、日程調整

課題2

• 学生側

1. 履修者数の伸び悩み
2. 単位取得を目的とする学生の実習に対する意識
3. 農家とのトラブル（コミュニケーションの難しさ）
4. 農家派遣に適さない学生へのケア

• 農家側

1. 学生を労働力として過度に期待する農家の存在
2. 学生受入を希望する農家に学生をマッチングできない（希望農家数 > 履修学生数）
 - 受け入れたい農家戸数は減っていない（雇用が厳しい現状を反映？）
3. 農協などが取りまとめてくれる農家の質
4. 学生受入の環境（食・住・従業員や家族）

まとめ

- 農場実習、農家実習は大学の看板ではあるが・・・
- いわゆる「農場の先生」は絶滅危惧種？
 - 担当教員には、専門性よりも総合力、現場調整力が求められる
 - 研究室体制の多様化（家畜生産系研究室の減少）
- 学生も変わってきている
 - 農作業に関心の薄い学生
 - 農家実習の履修者数の減少
- 大学農場の質の確保
 - 大学農場の営農・経営レベルは農家に置いて行かれている
 - 高レベルで最新の農業を学びたい学生の欲求に答えられない
 - 経費削減（農場は赤字部門）
 - 生産に対する投資ができない
 - 技師の増員、教育・訓練ができない
 - 農場であって農家でない：農水省の助成を受けられないことが痛い

生産現場が求めるスキルと若手人材

太田 雄大

(十勝農業協同組合連合会)

「生産現場が求めるスキルと若手人材」

十勝農業協同組合連合会 太田 雄大

十勝農業協同組合連合会は十勝地区の 23 農協を会員とする地区連合会です。会員農協・農家組合員の生産に係る支援・指導業務が事業の柱です。農産部では、馬鈴しょ、豆類、小麦などの種苗事業を担い、採種圃場管理の現地指導や種子伝染性病害の検定、病虫害防除対策を行っています。また、「十勝地域組合員総合支援システム（T A Fシステム）」を活用したスマート農業の導入や、有用微生物資材の開発、更には、土壌、飼料の分析、農産物の残留農薬自主検査なども行っています。

畜産の事業も多岐にわたります。酪農部門では、例えば、昭和 58 年に生乳分析体制を整備し、これら情報をもとに牛群の生産性評価を行う「十勝酪農経営情報システム」を先駆的に構築しました。また、飼料設計や牛舎設計など欧米の先進的な酪農技術導入にも取り組んできました。最近では、自給飼料の栄養収量と品質の向上を目的に、4 年間で 3,600 圃場もの植生を調査し、草地更新を推進しました。和牛部門では育種改良にゲノミック評価などの最先端技術を導入する一方で、農場を巡回し、適正な飼養管理や削蹄、牛体衛生管理などの基本作業を推進する堅実な仕事も行います。また、畜産検査センターでは先進的な検査技術や検査項目の導入調査などを行うとともに、生産現場での乳質改善指導を行います。その他に、死亡家畜を処理するレンダリング事業や育成牛の預託事業なども行っています。本会では、地道に技術を身に付け、生産者を下支えする仕事が多く存在します。

畜産部と畜産事業部の職員 34 名の内、大学教育を受けた技術スタッフは 21 名です。畜産専攻に限らず農業経営や畑作関係を専攻してきたスタッフも活躍しています。この内、20 代、30 代のスタッフを中心に大学の家畜生産実習について以下の内容を聞き取りました。

- ① 学生時代に受講して良かった（印象深い）実習は？
- ② 現在の仕事に活かされている実習は？

- ③ 学生時代に経験しておいた方が良い実習やアルバイトは？
- ④ 「このような実習や授業があればよかった」と思うものは？
- ⑤ 新採用職員（後輩）にはどのようなスキルや経験を望む？

非常に興味深かったのは、①は年代や業務内容に関わらず、「牛・豚の飼育⇒と畜⇒製造加工」の実習が多く挙げられたことです。搾乳作業や直腸検査、削蹄、除角などもありました。②③④の回答には農家実習が共通していました。また、生産現場で活躍している技術者の講義やバーンミーティングなども挙げられました。⑤については、ほとんど全てが「コミュニケーション力」となりました。これは“人”との繋がりの中で事業を進める本会の特性かもしれませんが、技量の向上には欠かせない大切な技術という認識のようです。

考察すると、生産現場を五感で感じ、日常では経験できない実習を求めているのかもしれませんが。しかも経験する種類は可能な限り多くです。大学は社会に出るまでに多くの学びを経験できる場と言われます。まさに今回の結果と合致しています。①の設問に関しては、「なし」という回答はありませんでした。このことは、これまで実施してきた実習カリキュラムは必要であることを示しています。②③④⑤からは、スキルを身に付けるよりも、多くの実習や仕事を経験し、その中で多くの人に触れ、情報を得て、コミュニケーション力を高めた方が良いと読み取れました。これらは、大学内だけでは対応できないかもしれません。近年、大学と企業の技術連携が進められていますが、家畜実習を目的とした生産現場との連携を深めても良いのかもしれませんが。大学と生産現場が一体となり「人材」を育成し、酪農畜産業界が発展することを願います。

最後になりますが、農作業事故を防止する授業や実習だけは、今後も継続することを望みます。

